

パラフレーズ分析について

——平家物語・章段「殿下乗合」の構成をめぐって——

“PARAPHRASE ANALYSIS”

CONCERNING THE COMPOSITION OF THE CHAPTER
“TENGA NO NORIAI,” OF *HEIKE MONOGATARI*

Karel FLALA*

I conducted a synchronic paraphrase study and a diachronic paraphrase study with 96 subjects. As a result, the following order was obtained: “Shibubon Type” and “Jōsuiki Type” → “Genpei Tōjorōku Type” → (“Old Enkeibon” →) “Present Enkeibon Type” and “Nagatobon Type” → “Nantobon Type” and “Yashirobon Type” → “.....” → Kakuichibon Type.

要旨

拙論では、「最短文」という概念を設定するが、それは所与文章の意義内容を不変にした場合、一つの独立文に置き換えうる節（a clause）あるいは節の連鎖として定義される。一定の文章をその異態（パラフレーズ・バリエーション）と対照する時、最短文レベルで検証する方が文あるいは節のレベルで検証するよりも容易である。

筆者は、資料提供者九十六名を対象に、文章受容の実験（共時的パラフレーズ調査）を行い、これを基に最短文分解の基準を設定し、更に平家物語章段「殿下乗合」の、古態と見られる諸本を資料に、この章段を構成する最短文の整列を抽出した（通時的パラフレーズ調査）。従来、諸本の成立順について諸説が展開されてきたが、筆者による調査分析の結果、次のような文章異態類の序列が得られた：四部本類と盛衰記類 → 源平闘争録類 → （「旧延慶本」 → ）現延慶本類と長門本類 → 南都本類と屋代本類 → ... → 覚一本類。

*国際日本文化研究センター外国人研究員（客員助教授）。チェコスロバキア科学アカデミー東洋研究所常任研究員。カレル大学文学博士。1975～79年京都大学留学、博士課程修了。論文に「日本語複合動詞論」「日本語テキスト文法論」「日チェ文化交流史」「Jak jsme poznávali Japonsko」（近世・近代ボヘミアにおける日本文化の認識）、翻訳に「新古今和歌集」太宰治『家庭の幸福、微かな声』大江健三郎「アトミックエイジの守護神」などがある。

次に最短文より上位の単位として、時間的配列をなさない「小事件」と、時間的配列をなす「小事件群」を提起し、「小事件群」と「文段」との関係を吟味した。各旧本における「小事件」配列の比較からも先述の「殿下乗合」文章異態類の成立順が裏づけられると考える。

一、理論的背景

一・一、目的

本研究のねらいは、言語主体によるパラフレーズを基に、文章（「テキスト」）内容の基礎単位を探ることにある。更に、資料に用いた平家物語の章段「殿下乗合」の、共時的・通時的変動についても明確にしたい。

一・二、基本概念

L・Chafe^(注1)が示したように、口頭による談話では、「イントネーション文」よりも短い認知的単位（Focus of consciousness）が存在し、この単位の存在は心理学的方法により裏づけることが出来る。但し、この認知的単位は、言語形態を欠いている事から、言語の一単位としては、認めることが出来ない。

また文は、その「意義的完結性」^(注2)が、具体的な文章の中では相対的であり、文の切り方に多数の可能性がある点から、文章内容の単位と合致しないと考える。言語行為の主体は、文章の内容を言語化する時、文の切り方がある程度、自由に選択している。

拙論で行ったパラフレーズ調査からも明らかであるように、素材表示の形態素（meaningful morphemes）のレパートリーや挿入節・修飾節を除く述語の順序を、不変と考えた場合、文の切り方の自由範囲は、自ら、限定されてくる。例えば特定の文章を、いくら短く切ろうと試みても、文として独立させることの不可能な節が、確かに存在する。この限界ぎりぎりの短文表現様式において、初めて文の内容は、先に述べた認知的単位の内容と一致し、意義と形態を備えた単位が得られる。この単位を「最短文」と呼ぶことにする^(注3)。

最短文には必ず、独自の焦点（focus rheme）があり、パラフレーズ作業によって独立文へ転換することが出来る。

平叙最短文の配列は、命題の配列とほぼ一致する。従って、最短文と文章の内容との関係は、節と文章の内容との関係よりも直接的で、パラフレーズ作業で結ばれた文章異態の相関については、各々の最短文連鎖の対照比較によって、調べることが出来る。

特定の文の連鎖を最短文の連鎖へ転換する事を、「最短文への分解」と呼ぶことにする。

記述レベルにおける最短文間の重なりを避ける為に、挿入節と非限定節（後続する名詞句に意義的限定を加えない節——^{注4}）を最短文として扱い、これらの節を本来含んでいた最短文の直語に配置する。（例：「七月十七日——その日に雨が降っていた——東京へ帰った。」→「七月十七日東京へ帰った。その日に雨が降っていた。」）

二、分析の資料

拙論では、まず準備段階として、平家物語巻一章段「鱸」を分析し、次に準備段階からの結果を踏まえた上での、本格的検証として、章段「殿下乗合」（全文）を分析した。共時的パラフレーズの調査では覚一本（覚、^{注5}）の文章を、旧本間の通時的対照の調査では四部合戦状本（四、^{注6}）、源平闘争録（源、^{注7}）、延慶本（延、^{注8}）、源平盛衰記（盛、^{注9}）、長門本（長、^{注10}）、南都本（南、^{注11}）、屋代本（屋、^{注12}）をそれぞれ使用し、平松家本（平松、^{注13}）竹柏園本（竹、^{注14}）、百二十句本（百二、^{注15}）を参考資料として用いた。

平家物語という特定の作品を、分析資料として選んだ動機は、実質時間内に行なわれるパラフレーズ作業の、共時的、通時的両側面を併せて把握したかった点にある。もしも平家物語の複雑な成立過程を窺わせる諸本間の相互関係を、幾多の文才のある作者達が長編作品において行った、パラフレーズ作業の結果と見なし得るならば、現代では、もはやこのような大規模な作業は望み得ないであろうと思われる。故に、筆者が目指す通時的パラフレーズの研究にとって、

平家物語はまたとない資料である。

三、共時的実験

三・一、最短文への分解の検証

先ずはじめに、名古屋大学生四十九名（以下名）、上智大学生四十七名（上）を対象に、章段「鱸」の一部（「古へ……侍共にくはせられけり」）を、文を出来るだけ短く切った文章に書きなおす作業を行うよう指示した。この作業は被験者達が経験を得る為の準備段階であった。次に、はじめのパラフレーズ作業から経験を得た被験者達に、章段「殿下乗合」を、準備段階での作業を念頭に置きながら、文を切りたいと思う箇所を点で示すように指示した。また作品の特殊性を考慮して、同じ作業を大学教授二名にも依頼した。

被検文章は付録1、分析結果は表1で示した。

付録1・被検文章（数字、符号付の数字はセの切れ目、下線は最短文の切れ目を示す）

さるほどに1、嘉応元年七月十六日2、一院御出家あり3。御出家の後も3'万機の政をきこしめされしあひだ4、院内わく方なし5。院中にちかくめしつかはるる公卿殿上人、上下の北面にいたるまで6、官位捧禄皆身にあまる斗なり7。されども8人の心のならひなれば8'猶あきだるで9、「あっぱれ、其人のほろびたらば其国はあきなむ。其人うせたらば其官にはなりなむ」10　なんど10'、うとからぬどちはよりあひよりあひささきあへり11。法皇も内々仰なりけるは12、「昔より代々の朝敵をたいらぐる者おほしといへども、いまだ加様の事なし。貞盛・秀郷が将門をうち、頼義が貞任・宗任をほろぼし、義家が武衡・家衡をせめたりしも、勳賞おこなはれし事、受領にはすぎざりき。清盛がかく心のままにふるまうこそしかるべからね。是も世末になって王法のつきぬる故なり。」と仰なりけれども13、つるでなければ御いましめなし13'。平家も又別して14、朝家を恨奉る事もなかりしほどに15、世のみだれそめける根本は16、去じ嘉応二年十月十六日17、小松殿の次男新三位中将資盛卿17'、其時ははまだ越前守として18　十三になられけるが18'、雪ははだれにふったりけり19、枯野のけしき誠に面白かりければ20、わかき侍ども三十騎めし具して21、蓮台野や紫野、右近馬場にうち出て22、鷹どもあまたすへさせ23、鶉・雲雀をおったておったて24、終日かり暮し25、薄暮に及て25'　六波羅へこそ帰られけれ26。其時の御摂祿は松殿にてましましけるが27、中御門東洞院の御所より御参内ありけり28。都芳門より入御あるべきにて29、東洞院を南へ30、大炊御門を西へ御出なる31。資盛朝臣大炊御門猪熊にて32、殿下の御出にはなづきにまいりあふ33。御ともの人々34　「なに者ぞ、狼藉なり。御出のなるに、のりものよりおり候へ…」といらうけれども35（資盛）、余りにほこりいさみ36、世を世ともせざりけるうへ37、めし具したる侍ども、皆二十より内のわか者どもなり39。礼儀骨法弁へたる者一人もなし40。殿下の御出ともいはず41、一切下馬の礼儀にも及ばず42、かけやぶってとほらむとする間43、くらは聞し44、つやつや入道の孫とも知らず45、又少々は知たれども45'そらしらずして46、資盛朝臣をはじめてして47、侍ども皆馬よりとって引おとし48、頗る恥辱に及けり49。資盛朝臣はうほう六波羅へおはして50、おほちの相国禪門に此由うったへ申されければ51、入道大にいかって52、「たとひ殿下なりとも、浄海があたりをばはばかり給べきに、おさなき者に左右なく恥辱をあたへられけるこそ遺恨の次第なれ。かかる事よりして、人にはあざむかるるぞ。此事おもひしらせてまつらでは、えこそあるまじけれ。殿下を恨奉らばや」とのたまへば60、重盛卿申されけるは61、「是はすこしもくるしう候まじ。頼政・光基なンド申源氏どもにあざむかれて候はんは、誠に一門の恥辱でも候べし。重盛が子どもとて候はんずる者の、殿の御出にまいり逢て、のりものよりおり候はぬこそ尾籠に候へ」とて62、其時事にあふたる侍どもめしよせ63、「自今囲蕃も、汝等能々心うべし。あやまって殿下へ無礼の由を申さばやとこそ思へ」とて64　帰られけり65。其後入道相国66、小松殿には仰られもあはせず67、片田舎の侍どもの68、こはらかにて入道殿の仰より外は69、またおそろしき事なし70　と思ふ者ども71、南波・瀬尾をはじめとして72、都合六十余人召よせ73、「来二十一日、主上後元服のさだめの為に、殿下御出あるべかむなり。いづくにても侍うけ奉り、前駆御隨身どもがもとどりきつて、資盛が恥すすげ」74　とぞのたまひける75。殿下是を夢にもしろしめさず76、主上明年御元服77、御加冠拜官の御さだめの為に、御直廬に暫く御座あるべきにて79、常の御出よりもひきつくろはせ給ひ80、今度は待賢門より入御あるべきにて81、中御門を西へ御出なる82。猪熊堀河のへんに83、六波羅の兵ども84　ひた甲三百余騎85侍うけ奉り85'、殿下をなかにとり籠まいらせて86、前後より一度に87　時をどッとぞつくりける88。前駆御隨身どもがけふをはれとしゃうぞひたるを89、あそこに追ひかけここに追つめ90、馬よりとって引おとし91、さむざむに陵轢して92、一々にもとどりをきる93。隨身十人がうち94、右の府生武基がもとどりもきられに

けり95。其中に96、藤藏人大夫隆教がもとどりをきるとて97、「是は汝がもとどりとと思ふべからず。主のもとどりとと思ふべし」といひふくめてきてンげり99。其後は100、御車の内へも弓のはずつきいれなンドして101、簾かなぐりおとし102、御牛の駄・胸懸きりはなち103、かく散々にしちらして104、悦の時をつくり105六波羅へこそまいりけれ106。入道「神妙なり」とぞのたまひける107。御車ぞひには108、因幡のさい使109、鳥羽の国久丸と云おのこ110、下臈なれどもなさけある者にて111、泣々御車つかまって112中御門の御所へ還御なし奉る113。束帯の御袖にて御なみだををさへつつ114、還御の114'儀式のあさまし115、申も中々おろかなり116。大織冠・淡海公の御事はあげて申に及ず117、忠仁公...より以降119、摂政関白のかかる御目にあはせ給ふ事120、いまだ承及ず121。是こそ平家の悪行のはじめなれ122。小松殿こそ大にさはがれけれ123。ゆきむかひたる侍ども12皆勘当せらる125。「たとひ入道いかなるふし議を下知し給ふとも、など重盛に夢をばみせざりけるぞ。凡は資盛奇怪なり。梅壇は二葉よりかうばしとこそみえたれ。既に十二三にならむずる者が、今は礼儀を存知してこそふるまうべきに、か様に尾籠を現じて入道の悪名をたつ。不孝のいたり、汝独りにあり」とて126、暫くいせの国にをくださる127。されば此大将をば128、君も臣も御感ありけるとぞきこえし129。

表1 共時的なパラフレーズ調査の結果

(単位：各セを指摘した被験者のパーセント)

原文	分解性				結合性				要約後残存			
	セ	名	上	平	京	府	西	平	府	西	平	府
3。					86	58	66	70	74	3	39	
4 :	62	68	65	46	78	51	58	70	47	59		
5。				27	8	49	28	7	8	8		
7。				59	65	32	52	67	24	41		
9 :	59	55	57	36	57	54	49	41	0	21		
11。				5	26	41	24	53	47	40		
☆!12 :	57	55	56	63	78	88	78	56	26	36		
13 :	78	80	79	40	39	32	37	63	55	59		
13'。				46	61	41	49	26	13	40		
14 :	40	62	51									
15 :	78	71	74	0	39	41	27	37	13	25		
☆!16 :	14	42	28	5	0	15	7	14	11	13		
17 :	45	54	50									
☆!18' :	78	77	78	32	57	37	42	96	84	90		
19 :	71	82	76	82	83	80	82	0	13	7		
20 :	70	63	66	5	31	39	25	0	16	8		
☆!21 :												
☆!22 :	74	77	76	0	26	37	21	70	76	73		
25 :	59	55	57	?	81	66	74	19	53	36		
26。				0	8	37	15	78	55	67		
27 :	80	75	78	50	47	46	48	78	39	59		
28。				68	83	66	72	41	16	29		
☆ 29 :												
31。				32	26	32	30	15	45	30		
33。				9	43	66	39	96	68	82		
☆ 35 :	74	68	71	23	39	47	37	82	47	65		
36 :	49	46	48	55	53	52	53	11	13	12		

137	: 49	43	46	23.	26.	21.	23.	37	29	33	
39	:			: 66	91	59	79	22	24	23	
40.	:			: 64	74	83	74	44	21	33	
☆ 41	: 60	54	57	73	87	76	79	44	21	33	
☆ 42	: 71	80	76	68	87	49	68	33	34	42	
☆ 43	: 29	18	24	15.	17.	63	32.	63	32	48	
44	: 52	50	51	23.	22.	5.	17.	74	39	9	
45	: 69	71	70	77	70	83	77	74	39	57	
☆ 46	: 67	70	69	23.	35.	22.	27.	41	24	33	
48	: 28	18	24	:							
49.	:			: 9.	13.	10.	11.	70	34	52	
☆ 50	: 63	59	61	72	74	66	70	41	45	43	
☆ 51	: 83	80	82	55	35.	59	50	85	74	79	
☆ 52	: 56	57	57	46	16.	81	48	47	57	52	
60	: 76	69	73	9.	31.	61.	34.	52	76	68	
62	: 72	57	65	46	52	44	47	66	74	70	
63	: 72	75	74	82							
65	: 75			: 0.	13.	37.	17.				
67	:			: 46	39.	54	46	63	35	49	
☆ 70	:			:							
73	: 74			: 41							
☆ 74	:			:							
75.	:			: 5.	13.	34.	17.	93	82	88	
76	: 80			: 18.	43	34.	32.	52	50	51	
80	: 77			: 32.	26.	29.	29.	18	41	50	
☆ 81	:			:							
82.	:			: 14.	43	29.	29.	37	24	31	
☆ 83	:			:							
85	: 73			: 46	52	51	50	100	94	97	
89	: 57			: 27.	43	59	43	7	21	14	
90	: 57			: 64				37	50	44	
☆ 91	: 59			: 59	74	73	67	33	55	44	
92	: 43			: 46	48	85	60	85	59	72	
93.	:			: 18.	74	71	54	33	26	30	
95.	:			: 0.	87	15.	34.	19	56	38	
☆ 97	:			: 46							
99.	:			: 0.	14.	27.	14.	33	39	36	
☆ 101	: 52			: 59	91	81	77	33	29	31	
102	: 63			: 55	74	73	67	15	18	17	
103	: 59			: 55	70	54	61	15	21	18	
☆ 104	:			:							
105	:			: 55	17.	39.	38.				
106.	:			: 14.	57	39.	37.	74	24	49	
107.	:			: 0.	4.	29.	11.	59	29	39	
☆ 109	:			:							
110	: 39			: 32.	57	71	53	22	32	28	
111	: 75			: 46	57	54	52	7	15	11	
112	:			:							
113.	:			: 14.	30.	49	31.	22	44	33	
114	: 48			: 46	43	54	48	7	3	5	
☆ 114'	: 39			:							
116.	:			: 9.	57	56	41	81	41	61	
121.	:			: 18	57	59	45	59	53	56	
122.	:			: 0.	8.	46.	18.	96	41	69	
123.	:			: 50	74	71	65	96	18	53	

125。	27。	52	59	46	85	74	80
126。32	14。	22。	42	26。	59	79	69
127。	14。	35。	51	33	100	38	69
129。	。	。	。	。	78	32	55

解説：名は名古屋大学、京は京都大学、上は上智大学、府は京都府立女子大学、西は西京商業高等学校の学生被験者で、平は平均値を表す。数値は被験者のパーセント（四捨五入）である。下線は、セの欄では切れ目が最短文の切れ目と一致する事を示しており、要約後残存の欄では50%以上の数値を示す。「☆」印と「！」印は、教授の判断が学生被験者の判断と異なるケースを表し、右線は、学生被験者の判断が筆者独自の検証結果と合致しない箇所を示す。まる「。」はセの欄では文の切れ目、結合性の欄では40%以下の結合性を示す。

筆者による最短文の切れ目についての検証の際、判断しにくいセについて次の補助基準を応用した：

セ	先行行を 総括し、 反復する	構文的成分の 一成分である	モダリティーは 主句のモダリ ティーと異なる	評価 + 最短文 を切らない
4	-	-	-	-
15	-	-	-	-
16	-	-	-	-
29	-	-	+	+
62	-	-	-	-
97	-	-	+	+
104	+	-	-	+
111	-	-	-	-
114	-	+	-	+
117	-	+	-	+

諸本間に変動を示す最短の区画を被験者一名以上が点で示した箇所を「セグメント」と呼ぶ。拙論中、セグメント（略してセ）、最短文・文の記述に際しては、それを終末とする切れ目の番号を代用する。例えば、セグメント連鎖「123 45。」（下線は最短文の切れ目、。は文の切れ目）を例にとると、最短文3とはセ1. 2. 3. の連鎖で、文5とはセ1. 2. 3. 4. 5. の連鎖である。

表1では、50%以上の学生が点で示した箇所のみを表示した。数値はパーセント（四捨五入）で、平とは、各被験者グループのデータの平均値を表す指示である。但し、50%以下の数値であっても、大学教授か筆者自身の検証結果と一致しているケースでは、切り捨てず表示した。下線は分析結果（考察参照）による最短文の切れ目の位置である。このうち、国文科教授（一名）、英文科教授（一名）の切れ目についての判断が学生の判断と異なった位置では、それぞれ「！」印と「☆」印を付記した。

考察

被験者のデータの間に、かなりの一致が認められた。これを基に最短文の仮定的判定基準を次のように提起する。最短文の切れ目は、すべての

- (1) 文
- (2) 非限定節（被検文章中用例なし）
- (3) 非完結提題節^{注16}、（例：セ16）
- (4) 挿入節（例：セ44）
- (5) 直接話法による引用文（本論ではその内的分析については試みていない）
- (6) 引用文を導入しながら、それ以外の特定の具体的意義を託されている節（例：セ52「いかりて」

の切れ目である。

また次の(a)、(b)の状況を除く並列節の間にも、必ず最短文の切れ目を置く。

- (a) 自然な時間的順序に沿わない節の連鎖
- (b) その他の、「句点」で切ることが不可能な節の連鎖

但し、素材表示の形態素を変えない文として独立し得ない節は、最短文とは判

定されない。

被験者達のデータが、以上の判定基準に完全に一致しなかった問題点については、次の三・二項の考察の中で触れたい。

三・二、最短文の間の意義的結合性の検証

最短文への分解の経験を持たない京都大学国文学科学生（大学院生含）三十七名（京）、京都府立短期大学国文学科学生二十六名（府）、京都西京商業高校生四十四名（西）を対象に、三・一項の判定基準を基にして得られた被検文章の最短文の連鎖を、「自然な長さからなる文章」に結合するように、現代語訳（注5参照）を添えて依頼した。具体的指示として「自然な文章を目差して、一つの文（センテンス）としてまとめることの出来る文の番号を、一つの括弧かマルで囲んで下さい」、という形をとった。（例：（1、2、）（3、））。この結合認識の調査結果は表1にまとめた。数字は、各最短文と後続する次の最短文とを結合して、括弧で囲んだ被験者のパーセント（四捨五入）である。

考察

分解性（切れ目の認識率）と結合性（結合の認識率）との関係は、およそ反比例に近かった。しかし、例外のケースも見られ、その原因として次のような問題が考えられる。

（1）古典文章の解釈の問題

50%以上の大学生（特に名）がセ16（付録1と表1参照）で最短文を切らず、セ17（…年…月…日なりけり）、セ18、22、25でそれぞれ最短文を切っている。国文学科の教授はセ16～セ26を一個の最短文と見て、分解していない。しかし、小学館版の現代語訳と東大出版社版の英語訳^{注17}では、セ16は「……は次のような事件であった。」というように、独立した文として扱っている。セ16の切れ目の分解性は28%、結合性は7%であり、いずれも低い。

この現象は、セ16が古文特有の、述語に続かない非完結提題節^{注18}である為、独立しがたいという事実起因する。しかし拙論では、一応、意義的側面に重

きを置いて、セ16を最短文として扱う。

セ12は、学生被験者達だけがここを最短文として見て、現代語の連文型「言。伝。」（法皇も内々仰った。「……」（と…）。」に準えて分解を進めている。しかし、中世語では、「言+伝+言。」（仰なりけるは「……」と宣ひけり。）は、頻繁に使われる基本文型であり、現代語の「伝+言。」（…とおっしゃった）と同じ機能を果している。ここでは結合性も高い（78%）。ゆえに、セ12では最短文を切らない。セ43では、教授は最短文を切り、50%以上の学生が切らなかった点については、学生が形式名詞「間」の「接続詞のような用法」を充分意識していなかったからであろう。

セ110 は、延慶本との対比からも分かるように不整合な表現である。筆者は、語彙反復（御車ぞひには……御車つかま（ッ）て）を根拠に、素材表示機能の薄い動詞「残り」をここに挿入して、二つの最短文に分けたい。

セ114'～115は「還御す。+その儀式」に分解したいが、52%の学生が「還御」の動詞的性格には注目せず、ここを切らないことにしている。

(2)、被験者の個人差の問題

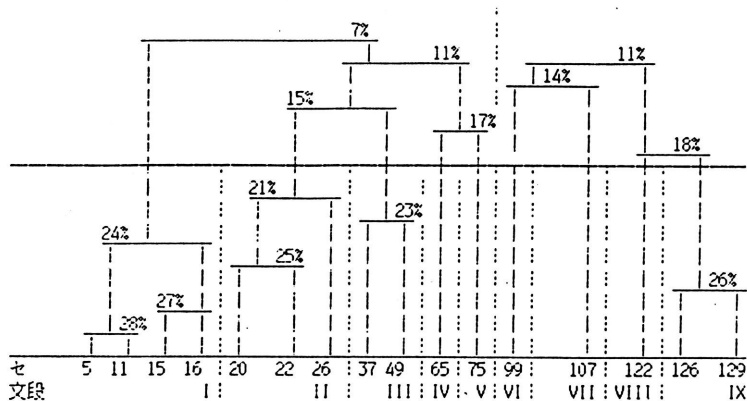
作文に上達した被験者は、セ52のような引用文導入の節（三・一、考察参照）を最短文として分解しない傾向が見られるが、筆者はこれを文体テクニク上の問題として受けとめ、セ52をやはり独立した一最短文と見る。主語が途中で変わる文の中であって、セ41、42、46、50は、主語が変わらないセグメントである。これらは教授（図中「！」印）のように最短文に切れ目を置かない方が、文体上に自然であろう。またセ36と37、先出のセ41と42、セ91と92は類義句であり、構文上並列し、意義上にも類似している。教授二名は、ここで最短文を切っていない。

しかし拙論では、やはり「限界ぎりぎりまでの分解」を優先し、セ36、41、42、46、50、91、はあえてすべて最短文の切れ目と見る。

結合性のデータは、読者による意義的ヒエラルキーの解釈と見なすことができる。結合性のデータは、図1の枝分かれ図で表した。表1からも読みとれる

ように、根本的なクラスタ（図1、文段境界レベルより上の部分は）各被験者グループ間で、大体一致している。これらのクラスタを読者の文段意識の現われと見たい。

図1. 覚一本に関する結合性認識のクラスタ図



——文段境界のレベル（文段を表2・表3の中で示した9つの「小事件群」と比べる為、同数の文段を目指し、相応しいレベルで厚線を引いた。文段と「小事件群」の対照については、表4参照。）

三・三、最短文連鎖の意義的要約の検証

先出の京都府立短期大学生三十六名（府）と京都西京商業高校生二十七名（西）を対象に、被検文章の全最短文連鎖が $\frac{1}{4}$ ～ $\frac{1}{2}$ の長さに短縮するように、物語の筋を支えていると思われる主要最短文のみを下線するよう指示した。この意義的要約調査の結果は、表1（要約後残存）の通りである。数値は現代語訳の全最短文連鎖中、各最短文を、要約にあたって消さずに残した被験者のパーセント（四捨五入）である。50%以上の被験者が残した最短文は、一応主要最短文と見て、表1で下線を加えた。

考察

意義的要約調査で得た主要最短文の連鎖が被検文章の概要となっている限り、この要約調査は充分信頼に値するものと考ええる。

各クラスタの中で、残存率が一番高い最短文あるいは最短文の集合を脱落すると、クラスタ内のすべての最短文を脱落しなければならない。このような、クラスタ内で残存率の一番高い最短文あるいは最短文の集合を、主要最短文と見る^{注19)}。即ち、主要最短文の存在がクラスタの理論的客観性を裏づけていると考える。

三・四、最短文より上位の概念

最短文の陳述が、文章において果す機能を基に、文章中の最短文を複数の部類に分配することが出来る（表2a、2b）。

例えば、物語体では「事件叙述の部類」が存在し、この部類に所属する最短文は、時間の順序で配列するのが一般である。

この外にも、被検文章では少なくとも「評価、信念の部類」、「解説、その他の部類」の存在を認めなければならないが、これらの部類に所属する最短文連鎖の位置は、「事件叙述の部類」に所属する最短文連鎖の位置によって定まる。換言すると、物語体の構造は「事件叙述の部類」によって支配されている。

ここで最短文より直接上位の概念として、次の二つの単位を提起したい。

1. 「小事件」—— 一最短文、あるいは明確に時間に沿って配列する複数の最短文から成り、その前後の小事件とは、明確な時間的配列をなさない（表2～4中A^{a(1)}、Ab1、Ab2、……Ac1 …で表記。Aa、Ab…は筆者が便宜上設定した「事件」の記号である。）

2. 「小事件群」は、一小事件、あるいは複数の並列小事件の群から成り、前後の小事件群とは明確に時間に沿って配列する（記号1、2、3…で表記、注20。）この「小事件群」は、表2aで示すように、「事件叙述の部類」のみに認められるから離れて再度叙述される「小事件」は、その叙述内容により、「事件叙述の部類」A、Bから部類C（評価、信念）あるいは部類D（解説、その他）へ転換したものとして扱う。（例：表26から読み取れるように、D：Ac3.2は「小事件」Ac3の叙述内容の再度の叙述であり、「小事件」Ac3の属する

「小事件群」(7) から離れて、部類Dに属している (表3参照)。

一方、結合性を基に設定した「文段」という概念は (図1) は、「小事件群」とは異なり、背景に被験者の意識が潜在する、より主観的な単位である。この背景の裏には、時順の、主語、視点、主題、場面等の一致、被検断編の長さ等が存在する。しかし、一般的には「文段」・「小事件群」の切れ目は、重なる傾向を示す。この点から、結合性のデータは「小事件群」の客観性の傍証であると言えよう (表4)。

表 2 a・部類 事件、「小事件」、「小事件群」の表

A・事件叙述の部類（一般）

- | | | |
|------|-------|---------------------------------------|
| | Aa | 高倉天皇御即位〔先行章段〕 |
| 1 | Aa' | 院御出家（1～3） |
| | Ab | 乗合事件—時間的設定（17） |
| 2 | Ab 1 | 摂政関白基房は京を通る（27～31） |
| | Ab 2 | 平資盛は遊びから帰る（21～26） |
| 3 | Ab 3 | 関白と資盛は乗り合い、挨拶しなかった資盛は制裁される（32～49） |
| | Ab 4 | 関白は奉行を諫める |
| | Ac | 報復事件—時間的設定〔Bcに含まれる〕 |
| 6 | Ac 1 | 関白は、何も知らず、再び京を通る（76～82） |
| | Ac 2 | 清盛の侍は関白を待っている（83～85） |
| 7 | Ac 3 | 清盛の侍は関白の御供を攻め、もとどりを切る（86～99） |
| (7') | Ac 4 | 清盛の侍は関白の車を襲う（100～104） |
| 8 | Ac 5 | 清盛の侍は六波羅へ帰る（105～106） |
| | Ac 6 | 関白は行方不明になり、賤民の家で見つかる |
| | Ac 7 | 関白の還御に御供が一人だけ仕る（108～113） |
| 9 | Ac 8 | 重盛は資盛と奉行を諫め、事件を奉行の所為にする〔Beを含む〕 |
| | Ac 8' | 重盛は資盛と奉行を諫め、事件を資盛の所為にする〔124～9〕〔Beを含蓄〕 |
| | Ac 9 | 西八条にもとどりのこしらえものがある |
| | Ac10 | 元服が延ばされる |
| | Ac11 | 御供が一人かつらを結んで、院参（、そして出家）する |
| | Ac12 | 関白は院参 |

B・事件叙述の部類（表現内的行為）・一部

- | | | |
|----|-----|----------------------------------|
| 4 | Ba | 重盛はAaを伝え聞き、次に清盛が伝え聞く |
| | Ba' | 資盛はAaを重盛、そして次に清盛に伝える |
| | Ba" | 資盛はAaを清盛に直接訴える（50～51） |
| 5 | Bb | 重盛は大騒ぎを鎮め、侍に警告（61～65）〔Ceを含む〕 |
| | Bc | 清盛は報復を命じる（52～60、66～75）〔Cfを含む〕 |
| -9 | Bd | 清盛は関白院参を伝え聞いて、批判 |
| | Be | 重盛は奉行、あるいは資盛を批判する〔Ac8,Ac8'に含まれる〕 |

C・評価・信念の部類の一断編（部類A, Bに依存）

- | | | |
|--|-----|--|
| | Ca | 院近くの公卿は、平家が国・莊園を塞いでいる事に不満（10～11） |
| | Cb | 院も平家に不満（12～13） |
| | Cc | 重盛の判断：報復すれば世の中が乱れる〔Bbに含まれる〕 |
| | Cd | 報復事件Acは摂政関白に対し、前例のない恥辱（盛、源、延、長、南）／恥辱の始め（屋、松）である（114～121） |
| | Cd' | 平家悪行の始めである（122） |

- Ce 重盛の判断：報復してはならない [-> Bdに含まれる]
 Ce' 重盛は（報復を）嘆く (123)
 Cf 清盛の判断：資盛の恥をすすぐべし [Bcに含まれる]
 Cf' 清盛の判断：資盛の恥をすすいでよかった (107)
 Cg 重盛の判断：資盛は事件の責任者である [Bd,Beに含まれる]...

D. 解説、その他（場面設定、纏め、背景、接続..）の部類の一段編（部類A, Bに依存）

- Da/Da' Aa(Aa') 後、院（法皇）は万事を行う（3'～5の状況設定としての面）
 Db 院の殿上人も栄えている（5'～7）
 Dc 殿上人はまだ飽きない（8～9）
 Dd Cbの為、Aa'(CbはAa'の原因である)
 Dd' Aa' にもかかわらず、Da'、Ca（3'～5の接続としての面）
 De Cbが行動に移らないまま、Ab,Ac が起こる (14, 15)
 Df Deが世の乱れの元（盛：運の傾くべき節）となる (16)
 Dg 資盛はAaの時、越前の守で、大変若い (17'～18) ...

解説：ここに掲げた「小事件群」は、(7'.)を除いては、旧本に共通の「小事件群」のみであり、各旧本に共通のあらすじとなっている。A., B., ... は部類、Aa, Ab, ..., は「事件」、Aa, Aa', ... は「小事件」、1., 2. は「小事件群」である。拙論では、部類D. の始めだけを扱った (Dh 雪がほだれに降っていた (19), Di 枯れ野の風景は美しかった (20)、と続く)。下線は覚一本の「小事件」を示す。括弧で囲まれた数字は、覚のセの番号で、四角括弧に囲まれた注も覚についてである。(7'.) は、覚独自の「事件群」である。「-9.」は「小事件群」9. の一部分である。

表2b・表2aの項目Ca～Cb, Cd～Dgの位置づけ

文章異態類	全本	盛	他	本項目を含む全本
先出項目	Dc	Ca	Ca	Ac3,4,5 か7 (先動詞)
本項目	Ca	Cb	Cb	Cd, Cd', Ce'
後出項目	Cb	Cd	Def	Cf'

文章異態類	本項目を含む全本							
先出項目	Dd'	Da()	Db	Db	Aa'	Cb	De	
本項目	Da'	D b	D c	D d	Dd'	D e	D f	D g
後出項目	Db	Dc	Ca	Aa'	Da'	Df	Ab	Ab2

表では、それぞれの「本項目」の上に、それに先出する項目、下に後出する項目を表した。表中の「全本」とはすべての調査された旧本、「他」とは盛以外の全本の事である。

各類の項目の並べかたを線条的図面で表すと、ほぼ次のような項目順が得られる（子細について表3参照）：

盛	Aa-Da-Db-Dc-Ca-Cb-Dd-Aa' -
他 (Aa...)	Aa' -(Dd'-)Da()-Db-Dc-Ca-Cb (De-Df-)...Dg-Ab2...Ba~Bc - Ac1-...

	Cd	...
	Cd'	...
Ac3(4)	Ce'	...
	Cf'	...
Ac5	Ac7	Cd
Ac3 ~6		Cd'
		Ce'

加えて、Cd（関白の侮辱の浅ましさ）は関白侮辱の叙述、Cd'（平家の悪行の始めであった事）は平家悪行の叙述に後続する事が望ましい。その為、項目の配列

- 1) Ac11-Cd'（四）〔御供は院参（出家）、これは平家悪行の始めであった〕（Cd'はAc3, 4, 5, 6, 7のどちらをも直接に受けず、Ac11に後続する故に、Ac11は平家の悪行として解釈されがちである）
- 2) Ce'-Ac8-Ac7... (Cd-)Cd'（源、延、長）〔重盛は報復を嘆き、奉行を諫める、その後、只一人の御供が関白の還御に仕る、これは恥辱であり、平家悪行の始めであった〕（Ce'はAc7, 8,...の前にあり、Ac8はAc7の前にあり、Ce'からAc7までの箇所は平家の悪行として解釈されがちである）

は、不整合な文章であろう。（理由として、例えばAc11の挿入、Ce'～Ac7の移動が考えられる。その為、源、延、長で見られる項目順Ce',...Cd'が相対的に新しいという可能性が強い。）

表3. 「小事件」配列の対照

四	感	源	長	延II	南	屋	寛
先行 章段 Aa	Aa		Aa	Aa	Aa	Aa	Aa
1.			Aa'	Aa'	Aa'	Aa'	Aa' I.
Dabc	Dabc		Dd'	Dd'	Dd'
Cab	Cab		Dabc	Dabc	Dd' bc	Dd' bc	Dd' bc
	Dd		Cab	Cab	Cab	Cab	Cab
	Aa'						
	Def		Def.Cc1	Def.Cc1		Def.Cc	Def.Cc
2.							II.
百愚型	玉型						
Ab1	Ab1	Ab1	Ab1	Ab1	Ab1	Ab1	Ab1
Dg	Dg	Dg	Dg	Dg	Dg	Dg	Dg
Ab2	Ab2	Ab2.1	Ab2	Ab2	Ab2	Ab2	Ab2
Ab1				Ab1	Ab1	Ab1	Ab1
3.							
Ab3	Ab3	Ab3	Ab3	Ab3	Ab3	Ab3	Ab3
(Ac4)	(Ac4)	(Ac4.M)					
	(Ac8)						
4.							IV.
Ea1	Ea'1	Ea"	Ea"	Ea"	Ea"	Ea"	Ea"
5.							
Eb1.	Eb1.				Eb1.		
.Cc1	.Cc1				.Cc1		
.Ce1	.Ce1						
Ba2	Ba'2						
Bc1.	Bc1.	Bc1.	Bc1.	Bc1.	Bc1.	Bc1.	Bc1.
.Cf1	.Cf1	.Cf1	.Cf1	.Cf1	.Cf1	.Cf1	.Cf1
	Bb2.						
	.Cc2						
	.Ce2						
	.Cf2						
Eb2.	Eb3.	Eb.	Eb.	Eb.	Eb2.	Eb.	Eb.
.Cc	.Cc	.Cc	.Cc2	.Cc2			
.Ce2	.Ce3	.Ce	.Ce	.Ce	.Ce2	.Ce	.Ce
Bc2.	Bc3.	Bc2.	Bc2.	Bc2.	Bc2.	Bc2.	Bc2.
.Cf2	.Cf3	.Cf2	.Cf3	.Cf2	.Cf2	.Cf2	.Cf2
			(5'.)	M1	K	K	N
6.		Ac1.1					
玉百愚	N/Ac2	Ac2	Ac2.1	Ac2.1	Ac2	Ac2.1	VI.
Ac1	Ac1	Ac1.2	Ac1	Ac1	Ac1	Ac1	Ac1
Ac2	Ac2		Ac2.2	Ac2.2		Ac2.2	Ac2
7.							
Ac3	Ac3.1	Ac3	Ac3	Ac3	Ac3	Ac3	Ac3
	(7'.)	Ac4	Ac4.1	Ac4.1	Ac4	Ac4	VII.
			(7'.)	N2			
8.		Ac6	Ac6.1	Ac6.1			
			Ac4.2	Ac4.2			
		Ac5	Ac5	Ac5	Ac5	Ac5	Ac5

四	盛	源	長	延II	南	屋	寛
		Cf' Ce'	Cf' Ce'	Cf' Ce'	Cf'	Cf'	Cf'
	(8'.)	Ac8. .Be	Ac8. .Be	Ac8. .Be			
Ac7	Ac7.1 D:Ac3.2	Ac7	Ac7.1 Ac6.2	Ac7 Ac6.2	Ac7 (Ac6)	Ac7	Ac7
(8'.)	Ac4 D:Ac3.3 D:Ac7.2 N D:Ac7.3 Ac5	Cd	Ac7.2 Cd	Ac7.2 Cd	Cd	Cd	Cd
Ac11 Cd'	Cd	Cd'	Cd'	Cd'	Cd'		Cd'
9.	Ac10 Ch C秘本 Ce' Cf'	Ac10 Ch		Ac9	Ac9		IX.
Ce'	"Ac11" "Ac12"		Ac11 Ac12	Ac11 Ac12	Ac8 .Be	Ac8 .Be	Ac8 .Be

注：1. 2., ... 旧本共通の「小事件群」

(5'), 7'), (8'.)', ... 一部の本のみの「小事件群」

I～VIII 文段

全線「 」 「小事件群」の境界線

破線「- -」文段の境界線

引用符"×" 「×」に意義的に近い断編

括弧 (×) 「×」とかなりの差が認められる断編

M 通貞説話 K 影網説話 N 難波 経達の説話

解説：記号「D:」を前置した記号は、それが元々所属していた「小事件群」から離れて、再度に叙述される「小事件」を表す（部類Dへの転換）。例：「D:Ac3.2」は、「小事件群」7. から離れた、「小事件」Ac3 の再度の叙述である。記号「.」は内容の重なりを表す。例：「Ac8.Be」は、記号「Ac8」で示される内容と記号「Be」で示される内容が重なる箇所である。玉、愚、百はそれぞれ玉葉、愚管抄、百練抄の「小事件群」配列との一致を示す。記号の結合Cab,... は配列Ca-> Cbの略である。

唯一の直接史料である玉葉では、一般叙述部類の構成はAx（喜応二年七月五日の記録）+Ay（七月十五日の記録）+Az（十月二十一日の記録）である。平家物語ではAbはAxとAy、AcはAzとAyを基に出来たと考える。次に、Ab1 とAb2、BbとBc、Ac1 とAc2 の順序について考察してみよう。

	項目題	本	内容
1	Ab1-Ab2	盛(四でAb2 が支配)	基房の行進- 資盛の行進
2	Ab2-Ab1	四、延、南、屋、寛	資盛の行進- 基房の行進
3	2,3 の混合	源、長	混合
4	Bb-Bc-...	四、盛、南	重盛の反応- 清盛の反応..
5	Bc-Bb-...	その他	清盛の反応- 重盛の反応..
6	Ac1-Ac2'	四、盛?、寛	基房行進- 清盛の奉行待つ
7	Ac2-Ac1	源、南	清盛の奉行待つ- 基房行進
8	7,8 の混合	その他	混合
9	Ce'-Cf'	盛	重盛の反応- 清盛の反応
10	Cb-Dd-Aa'	盛	院は平家に不満の為出家??

解説：玉葉では事件Ab,Acの中心人物は基房で、事件を先に知り、評価したのは重盛である。その為、
下線した文章が古態に近いと考える。

一方、項目順10における配列は不自然で、史実からかなり離れた、再構成された文章である。

表4 文段分解の意義的背景、「小事件群」との対照表

文段	小事件群	項目	セ	文段の意義的内容
I.	1.	Aa'	1~3	Aa'
—		Da'd'	3' ~5	事件の成立状況
—		Da'bc,Ca	5' ~11	
—		Cb	12 ~13	
—		Def.Cc	14 ~16	
II.	2.	Dg	17' ~18	Ab
—		Ab, Ab2	17,21~26	資盛の行進
III.	3.	Ab1	27 ~31	関白基房の行進、資盛との乗合
—		Ab3	32 ~49	
IV.	4.	Ba"	50 ~51	B
—	5.	Bc1.	52 ~60	重盛、清盛のAbに対する反応
		.Cf1		
		Bb.Ce	61 ~65	
V.		Bc2.	66 ~75	清盛は報復 (Ac) を指令
—		.Cf2		
VI.	6.	Ac1	76~82	Ac
—		Ac2	83~85	兵は指令に従い、報復(もとどりを切る)
—	7.	Ac3	86~99	
VII.	(7'.)	Ac4	100 ~104	兵は指令以上に暴行し、帰ると、清盛に褒められる
—	8.	Ac5	105 ~106	
		Cf'	107	
VIII.	9.	Ac7	108 ~113	関白の選御、その評価
		Cd	114 ~121	
		Cd'	122	
IX.		Ce'	123	重盛はAcを嘆き、資盛を批判その評価
		Ac8.Be	124 ~129	

解説：この表は、「小事件群」配列（表2、表3）と、文段配列（図1）を対照して得られた。文段分解の裏には、時順の他、主語、主題、場面の一致、被検断編の長さなどがあると考ええる。例えば、小事件Ab2（資盛の行進）と小事件Ab1（基房の行進）は同時の出来事で、同じ「小事件」2. に所属する。しかし、部類Dの項目Dg（資盛の身分、年齢）と「小事件」Ab2との主語「資盛」は同一で、「小事件」Ab1の主語「関白基房」と強く対立している。その為、DgとAb2はともに文段II.、Ab1とAb3はともに文段III. に納められたと思う。なお、評価、信念の部類Cに所属する項目Cd, Cd'（乗合と報復の評価）は文章が短いため、文段VIII. に納まっている。

「—」線数は結合性で図った文段間の意義的な距離に比例する（図1参照）。

四、通時的調査

共時的なパラフレーズに見られる規則性が、中世期における被検文章の通時的変動にも応用できる事を想定し、筆者は覚一本の章段「殿下乗合」に照応する文章を、主な旧本を通して調査した。

従来、平家物語における章段、説話の配列の比較対照の研究や、各本と史実との対照についての研究などが広くなされて来てはいるが、文章上の細部に到る比較対照の研究の歴史はまだ新しく、この分野では富倉徳次郎氏、山下宏明氏などの研究が重要であろう。平家物語の成立過程については、その分析法により諸々説が異なり、山田孝雄氏^{注21}は屋、渥美かをる氏^{注22}と山下宏明氏^{注23}は四（あるいは源）、高橋貞一氏^{注24}は覚、水原一氏^{注25}、赤松俊秀氏^{注26}、古くから佐々木八郎氏^{注27}等、延を古態に最も近いものと見ている。

おそらく、短断編と長断編では、成立過程が質的に異なり、短断編の場合、一つの作業（例えばある特定の本を重視し、他の資料は参考のみに使用する）によるパラフレーズが考えられ、長断編の場合、複数の本を基にした複数の作業の組合わせにより成立したと思われる。

ここで取り扱う一章段「殿下乗合」の分析結果は、あくまでも局部的検証結果にすぎず、これをもって、平家物語全編の分析結果として解釈する事はできない。

著者は現存する各旧本を、それぞれ文章異態類（異形）の一個体と見る。但し、復元の為に必要なケースでは、もはや現存しない文章異態類も想定しなければならない。例えば、現存しない延Ⅰ^{注28}は、現存の延Ⅱ（現存の延慶本）と長との共通の祖態類（先行文章異態類）である。水原一氏は、現存の四、延の共通の祖態を「旧態延慶本」と呼んでいるが、「殿下乗合」では、祖態を現存の四から区別する根拠がないので、四類として分類した。

話者、書き手がある具体的内容を言語化する時の作業を、次の五つの段階——文章化（文章の内容を選択する段階）、センテンス化（文の切り型を設定する）、最短文化（最短文を切る）、フレーム化（格を決める）、語彙化（語彙

を選ぶ)に分けて分析する事を提起する(注1参照)が、拙論では最短文化の段階を柱とする、諸本間の比較分析を試みた。

各々の文章異態類中の結合性については、以下に揚げる最短文配列対照表から読み取る事が出来る。配列表は、各異態におけるセグメントの配列を表しており、厚線は最短文の切れ目、「。(マル)」は文の切れ目をそれぞれ表す。最短文を表すセの番号を最短文の指名番号と呼ぶ。この指名番号は、最短文の主語、述語、焦点(フォーカス)を一括して代表している。

文章異態Aにおいて、その各最短文に表現される叙述内容は、文章異態A'においては次のような形で現れることがある。

1. 最短文(異態間の一致)
2. 最短文の成分、語彙、語彙の成分、以下ではあわせて要素と呼ぶもの(異態間の類似)。
3. 実現に至らない、あるいは、最短文のレベルでは処理しがたいもの。

配列表では、あい対照するセグメントの間に明確な意義上のずれが見られた場合、それらのセグメント番号にそれぞれ下線、“ ”印、ローマ字による指標などの記号を付加した。(例えば、セ3、3、'3' "3"…は、意義上に多少のずれを、あい対照するセである)。但し、表現、表記上の細かな異同に関しては、比較の対象としなかった。

四・一、最短文連鎖の比較対照・配列表とその解説(付録2と注9を参照)

盛	"3" 5 4	5'' 6 6' 7 8 8' 9 9'	10 10'	11 12 13' 13'	2~3
四	3 5 4 5' 5''	5'' 6 6' 7 8 8' 9 9'	10 10'	11 12 13'	
延2-3	3 5 4 5' 5''	5'' 6 6' 7 8 8' 9 9'	10 10'	11 12 13' 13'	15'
長	3 5	5'' 6 6' 7 8 8' 9 9'	10 10'	11 12 13' 13'	15'
南(2-3 ...)		5'' 6 7 8 8' 9 9'	10 10'	11 12 13' 13'	15'
屋"2"3	3 4 5'	5'' 6 6' 7 8 8' 9 9'	10 10'	11 12 13' 13'	15'
寛1 2 3 3' 4 5'		5'' 6 7 8 8' 9 9'	10 10'	11 12 13' 13'	15'

注：源ではこの折編がない。

2-3 嘉応元年六月十七日上皇御出家…… “2”…七月廿日一院御出家……
“3”高倉院踐祚之後は 3’ 當今御即位後 4 被聞食（されしかば、ければ
……） 5 諍ふ無方 5’ 院内御中不疎（おろそかならず） 5’ 院内の御中
御ころよからず 5” 聞而（とぞ聞えし） 6 北面輩 6’ 程々随 6’
皆… 7 余身之程（身に余る程に） 8 蒙朝恩（朝恩を蒙りたれども） 8’ …
習にて 9 平の一類のみ國をも官をも多塞たる事を目醒く思て 9’ 此入道一
類國をも庄をも… 10’ 心中思（等） ’13’（家衡のことなし） ’13’思食立
せ給て “13” 一筋に後世の御勤思召たつと聞えし程に

付録2. 最短文配列対照表の説明と応用

最短文配列対照表の一例を挙げよう。

盛"16"17 × 27"28" { . ' 32' . } 34 35 42' 43 { 35/102 { . 49' } 101"/111" { 17' /18' "22" }
26/33

四	17	17	18		21		22/26'	27	28		32	33									
源	17	27	28	17	18	18'	22	23	24	25	19	20	25	26		"32"33					
延	16	17	17	18	22	23'	21	23	24	25	19	20	25	26	27	28	32	33			
長	16	17	17	18	22	23'	21	23	24		19	20	25	25	26	27	28	28'	32	33	
南	17	17	18	18		"21"	22	"23"		19	20	24	25	25	26	32	27	28		33	
屋	16	17	17	18	18'		19	20	21.22	23	24	25	25	26	27	28	29	30	31	32	33
寛	16	17	17	18	18'		19	20	21.22	23	24	25	25	26	27	28	29	30	31	32	33

表の各行は、それぞれの本におけるセグメントの配列を示している。寛の文章は次の通りである（常用漢字により表記、セの番号は便宜上セの頭に付加した）：

寛 16世のみだれそめける根本は、17去じ嘉応二年十月十六日、17'小松殿の次男新三位中将資盛卿、18其時はいまだ越前守とて18'十三になられけるが、19雪ははだれにふったりけり、20枯野のけしき誠におもしろかりければ、21わかき侍ども三十騎斗かりめし具して、22蓮台野や紫野、右近馬場にうち出て、23鷹どもあまたすへさせ、24鶉 雲雀をおったておったて、25終日かり暮らし、25'薄暮に及て 26六波羅へこそ帰られけれ。27其時の摂政祿は松殿にてましましけるが、28都芳門より入御あるべきにて、30東洞院を南へ、31大炊御門を西へ御出なる。32資盛朝臣、大炊御門猪熊にて、33殿下の御出にはなづきにまいりあふ。

寛以外の本については、主な異同のみに注目した。

盛"16"其時然べき運の傾く符にや、17同二年七月三日、x 法勝寺へ御幸ありければ、27当時の摂祿基房公（小字）号松殿"28"参給けり。'32'還御の後殿下三条京極を過給けるに x 三条面に女房の車あり。... 34居飼御厩舎人等、35車より下るべき由責けるに、42'聞入ずして、43やり過んとしけるを、102狼藉とて前前の簾、並に下すだれを切落たりけるに、x... x... 49'追果て散々に打けり。101"/111"東京極の小屋にやり入りにけり。17'/18'件の男は太政入道の孫、越前の守資盛也けり。"22"... 笛を習はんとて、... 雅盛が家に行たりけるが、26/33帰ける間参会にけり。

四 18其頃越前守御（小字）生年十一才 21相具若侍十四五人 22/26'自内野遊返時 27構臣... 松殿 28御所従法住寺殿中御門東洞院宿所成還御。32六角京極 33資盛参合。

源 23為小鷹狩 19降 20枯野景気憐之間'25'及夕 '26'下大宮大路還。"32"大炊御門大宮

延 16代の乱れける根元は、17'小松内大臣重盛... 二男 23'はひたかあまたすへさせて25'夕日山の端に傾て 26'京極を下りに被帰けり。

長 16世の乱れそめける根元は、20.. 景色.. 25'日山の端にかかりければ 26'帰られけるに、"28"院の御所法住寺殿へ参らせ給ひて、28'還御有けるに、..33'参合う。

南 '17'嘉応元年... "21"... 二三騎.. "23"小鷹ノ遊覧トゾ聞ヘシ '19'折シモ薄雪降タリ..

屋 '16'世の乱れ初ける始は..

表中の厚線は、最短文の切れ目を示し、対応するセを結ぶ（下線あるいは「"..."」、「'...'」で示された微妙な意味的なずれを無視した）。矢印「↖」は、文頭に向かって移動してきた最短文を示す。最短文配列対照表を基に、ほぼ次の最短文の切れ目の分布表が得られる。

盛	"16" 17-x "28"。17/18	"22"	'26'。26/33。
四	18	21-22/26'	28
源	'28' 18 18'	22 23 25。	'26'。28
延	18	22 23' 21-23	25。19 20' 26'。28
長	18	22 23' 21-23	19 20 26 28
南	18	22	19 20 26 28
屋	18' 19 20 22	25。	26 28, 31, 33。
覚	18' 19 20 22	25。	26。28 31, 33。

最短文の切れ目をなさないせは、最短文の認識に必要な場合のみ示した。(17-, 21-)。

次の表では、全文段「殿下乗合」の中の一部の最短文を選び、それらの各旧本間における位置の異同について表した：

最短文	3	5	10'	16	18'	20	28	45	61	51'	73	75'	80'	85'	89	92'	95	99	103	113	123
盛	A	A	A	A?	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
四	B	B	A	B	A	A	B	B	A	A	B?	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
源	(B	B	B	?)	B	B	A'	C	B	B	A	A	B	A	B	A	A	B	B	B	B
延I	(B	B	B	A	A	B	B	D	B	B	B	A	B	A	B	A	A	A	B	B	B
延II	A'	B	A	A	A	B	B?	D	B	B	B	A	B	A	B	B	A	A	A	B	B
長	B	C	B	A	A	B'	B	B?	B	B	B	B	B	A	B	A	A	B	B	B	B
南	A'	C	B	B	B'	B'	B	B	C	A	B	B	B	B	A	A	A	C	C	A'	A'
屋	A'	A	A	A	B	B''	A''	D	B	C	B	A	A	A	B	B	A	A	C	D	A'
覚	A'	C	C	A	B	B'''	A''	D	B	C	B	B	A	A	B	B	A	B	C	C	A'

表では各旧本における最短文の分布を示した。記号A,B,Cは最短文の異なった位置（不在を含む）、A', A'', ... はAの部分的変異、記号の結合AB,BDは重複を示す。括弧で囲んだ記号はいまいな箇所、あるいは他の本により補った箇所を示す。

最短文配列対照表と成立順の考察

1. 重複AB, BDの成立過程として、二つ以上の異なった位置A+B, B+Dの伝承が合流したことが考えられる。この観点から、次の推説を勧めたい：

45を基に、成立順（四あるいは南）類+（延あるいは屋あるいは覚）類→長類、85'を基に、成立順（盛あるいは四あるいは南）類+（源あるいは南）類→延。屋類。

2. 項1.によると、先に成立したと見られるどちらかの旧本類の一本のみが、後に成立したと見られる旧本類の一本か諸本と一致する箇所を基に、次の特定関係を推定する：

行3記号Bを基に、影響（四類→（延I、）長類；行3記号Aを基に、影響 盛類→延II、屋類；

行5記号Aを基に、影響 盛類→屋類；行16記号Aを基に、影響

盛類→延。長。屋類（？）：行18'記号Bを基に、影響 源類→屋類；

行 51'記号Bを基に、影響 源類→延。長類；行75'記号Bを基に、影響

四類→長類？： 欄85記号A(B)を基に、影響 盛類 →延。長。屋類 ；行103記号Bを基に、影響

源類→長類； 行113と123の記号Bを基に、影響 源類→延、長類。

総括すると、盛、四類と源類との成立が延、長類と屋類との成立に先行していたと考える。

3. 最短文配列と平行して、セの配列の合流を基に、成立順を推定することができる。

例1：（四：1717'18 |..21 22/26' 27 28..）+（盛：17..27'28"。.."22"26/33）→

（源： 17 27 28 |17'18 |...22 |..'26'。...）つまり四、盛 →源順

例 2 : (四 : 21) + (盛 : 85 (=21)) + (源 : 22 | 23) →

(延 : 22 | 23' | 2123 |), つまり四、盛、源→延順

例 3 : ((四 : ... | 45 | 45' | ... 34 35 |) + (盛 : 34 35 | ... 45 |) →

(源 : 34 45 | ... 45' | ... 35 |), つまり四、盛→源順

例 4 : (四 : 44 | ... 34 35 |) + (盛 : 34 35 | 42') + (盛 : 43 |) + (源 : 42 | 34 45 |) →

(延 : 42 | 34. 35 | 42' 43. 44 | 34 45), つまり四、盛、源 →延順

例 5 : (四 : 77~82 | 83~85') + (盛 : 75'~82 | 83~85'. 76~82) + (源 : 75'~82 | 83~85'.

76~82 |) →

(延 : 75' | 80' | 83~85'a. 76~82 | 83~85'b), つまり四、盛、源→延順 (「小事件」の対照表も参照)

同じく、「小事件」の配列からも成立順について判断することができよう。

例 1 : (四 : Bb2. Cc) + (盛 : De(f) ... Bd3. Cc) + (源 : Bb. Cc) →, (延、長、屋、覚 : Def Bd (...). Cc), つまり四、盛、源類 →延、長、屋、覚類順

例 2 : 「小事件」Ac5,...Ac8 (清盛の侍は六はらへ帰る) の、源、延、長、南、屋、覚への導入、つまり四、盛類→源、延、長、延、南、屋、覚類順が成立する。

4. 先学の成果を基に延Ⅰ→延Ⅱ、延Ⅰ→長の成立順を認めることができる。実際の生成過程の単純化になるが、最短文配列対照表から伺えるように、南は一種の合流簡略本であり、延から長への成立過程を前提としている。なお、最短文配列の段階的変遷から、延類、長類、から南類・屋類を経て覚への発達を考えることが自然であろう。

5. 四と盛との関係について、院の出家を記し、その動機を平家の行動と有縁させる記事が組み込まれていない事、内裏と院の関係が、「不疎」とされている事、登場人数の数値が低い事などの点で、四類の構想の方が古態性の要素を示す。この事は、山下宏明氏の観察 (例えば注24引用の作品、38~48首)、早川 厚一氏の四・源先行の仮名交じり本の説と合致して四類の部分的な古態性を裏付ける。

總めると、文章異態類の成立順 (接尾辞「一類」を省略した) 四・盛→源→延Ⅰ→長・延Ⅱ→南・屋→...→覚が推定される。最短文配列対照表で挙げた生成過程中のセ19、20、34の左への移動、設定人数の拡大、文章化の構想の変遷等が有力な傍証であろう。

文章化セ3'～5" 小政治圏（天皇、院の関係）の主題。平家物語のメインテーマとは無関係であるから、延以降では誤釈されたのであろう（セ5' 御中おろそかならず→セ5' 御中御心よからず。覚では、問題のセ5' は脱落にいたった。セ6～13御白河院の平家にたいする不満。盛（盛のみ）はこの後にセ2～3（院出家のこと）を挿入し、セ6の中の「法皇」を「一院」に改めた。延Ⅱと南とでは、セ2～3は断編セ6～13に前置されているが、この位置は意義上に不整合である。院御出家の日付については、史実は六月十七日であるが、屋では先行する高倉天皇御即位の日付（七月二十日）、平松～覚では後続する乗合事件に対する最初の対応の日付（七月十六日）となっている。これは語りにおける要素移転の一例であろう。センテンス化：セ3で文の結合性（70%）が50%を越えている事から、セ3のセンテンス化は、低結合性によるセンテンス化ではなくて、延における挿入の形跡と見たい。セ5、セ5"のセンテンス化は、小政治圏の主題を文として独立させている点から、意義的に整合であろう。読者による分析もセンテンス化を根拠づけている（結合性は28%に過ぎない）。セ7におけるセンテンス化は、セ6'における単語「程」の繰り返しを避けて、セ7をセ7「斗なり」へ改めた結果であり、意義上に不整合である（結合性57%）。セ10における終始形は、文の境界よりもむしろ中止法として受けとめるべきであろう（最短文化の意義的動機づけは不明）。

盛	16	17	17	27	28	{	...	32	...	34	35	42	43	35/102	{	...	43	{	101	111	{	17	18	{	22	36/33
四	17	17	18					21						22/26			27	28			32	33				
源	17	27	28	17	18	18	22	23	24	25	19	20	25	26							32	33				
延	16	17	17	18	22	23	21	23	24	25	19	20	25	26	27	28					32	33				
長	16	17	17	18	22	23	21	23	24	19	20	25	25	26	27	28	29	32	33							
南	17	17	18	18			21	22	23	19	20	24	25	25	26	32	27	28	33							
屋	16	17	17	18	18		19	20	21	22	23	24	25	25	26	27	28	29	30	31	32	33				
覚	16	17	17	18	18		19	20	21	22	23	24	25	25	26	27	28	29	30	31	32	33				

“16” 基中然べき運の傾べき符にや 16代（長世）の亂ける根元（16’始）は
17七月三日 17’其比越前守御^{生年}_{十一歳} 17／18件の男…資盛成けり 18’被成十三
19降 20憐之間 21…若侍十四五人 “21” …二三騎 “22” 還御の後殿下
三條京極を過給りけるに “25” 及夕 25’夕日山の端に傾て（長かかりければ）
26／33かえりける間、参合にけり 22／26’自内野遊返時 ’26’下大宮大路還
’26’京極を下りに歸けり ’28’院の御所法住寺殿へ参せ給て 28’還御有ける
に 28從法住寺中御門東洞院御宿所還御 “32” 大坎御門大宮 32’六角京極…
’32’三條面… 34居飼御厩舎人等

解説

文章化 提題節セ16「代の亂ける根元は」は、延類で始めて現われるが、これは、日本のセ62（重盛による報復禁止令）の中の、重盛の言葉（成世乱など）を基に成立したと考える。屋は、この重盛の言葉を反復として脱落した。更に屋では、セ122（平家悪行の始）も落し、セ122 に含まれた単語「始」が、セ16（世の乱れそめける始）とセ121（関白の恥辱の始）の中に使われている。このように、語彙反復により、事件の新しい枠組が設定されてくる。即ち、「世の乱れ」と「公家の軽視」は、平家の悪行として把えるよりもむしろ末法の現象として解釈されている。しかし、屋の後の諸本では、セ122 が再現し、先述の屋の構想は打ち消される。

事件当時の資盛の年令について、四、盛では正しく伝えている（約十才）が、源以降の構想では、資盛は十三才の若武者として鷹狩をしている^{注30}。乗車していた資盛が、騎馬姿となって描写されてくる。しかし、源ではこの構想は未だ不完全で、セ35は「……取引午車」となったり、セ48は「資盛以下侍共五六人自馬取引落」となっている（「以下」の解釈の問題もあろう）。源のセ48は、四のセ91（報復事件の記述）を要素として移動して成立したのであろう。延類になると、資盛騎馬の構想は徹底している。時間的設定 盛を除く全諸本では、乗合事件の日付「十月十六日」は、先学の指摘の通り、史実の「七月三日」とは一致しないが、報復事件の日付「十月二十一日」の五日前である。これはや

はり、先学分析の通り、因果関係の意識強化を意図した改作であろう。場所の設定 四、盛では、玉葉の「二条京極」に近い「三条京極」である。四は、法勝寺を「法住寺」と誤ったため、必然的に三条を二条に変え、現存の盛もこれに習ったのではなかろうか。侍の人数 セ21、73、85は、次の表の通りである。

セ	21	73	85
四	十四五		太多
盛			三十
源		十四五	六十
延	二三十	十四五	六十
長	二三十	六十	六十
南	二三?		三十
屋	二三十	六十	六十合計
百二	二三十	六十	三百
寛	三十	六十	三百

源セ73は、四のセ21の数字を利用した。後の諸本では、四、源両類の伝統を受けて、数字を徐々に増やしている。四類は、この点でも明らかに最も古態で、南は、盛・延類を参考にしたものであろう。センテンス化 四の中では、セ13「…程に」はもともと提題節であったが、新しく提題節セ15が設定されると、表現「程に」はセ15に「呑み込ま」れ、セ13は文として独立した（覚では、セ13'の結合性は49%）。四類の古態性は、ここでも明確である。

盛	61 62a("16"を含む) × { 45 45 } × 125 { ...96' }	
四	42 44 45 (45 34 35) 101 102	49'
源	36 37 38 40 41 42 34 45 45' 43 35 46' 46' 47 48'	49'
延	36 37 38 39 40 41 42 34 35 42' 43' 44 (34' 45 47 48	49'
長	44a (45a) 36 37 38 39 40 41 42 34 35 42' 43' 44b 34' 45b 47 48	49'
南	45 (45' 34 35' 35 39) 40 43' 44 47' 48' 49' 49'	
屋	36 37 38 39 40 35 42' 43 44 (34 45 45' 47 48 49	
寛	34 35 (36) 37 38 39 40 41 (42 43 44 45 46 47 48 49	

“16”加様の事にこそ世の大事も引出せ 34前駟……しきりにこれをいらつ
 34→34 35殿下御出奉乗相取引下牛車 39十六七の若者にて 42従車不下 42'
 更に耳にも不聞入 44、44b聞き程にてはあり 44aよるにてありければ 45

殿下の御出とも不知 45a不知越前守 45b→45 45'只人思不礼(思只打任人)

46御隨身共従馬躍下 46'拔大刀 47'主人ハ見ヘス 48五六人…引落 “48”
馬ヨリ取テ引落モアリ 49散々追散 49'散々に□□□□せられけり 49'追掛
て散々に打けり “49”散々ニサレニケリ 49'時ニ取テハ恥辱ナリ 61小松殿
基比大納言にて御坐しけるが 62a → 62 96'前駈七人追却せられけるに 101
打程 102車物見打破125…大いに被教訓けり

解説

文章化 乗合事件の展開。文脈の成長に伴い主語セ34は、上掲のセ19、20と同様に文頭に向って移動してきた(矢印「↖」で示した、主語の上昇)。源類では、このセ34は、元々の直接後続のセ35から離れてきたので、延は新しい主語セ34'を設定している。延ではセ35がセ43の前に置かれるが、この事から資盛の傲慢な行動セ43は、戒めセ35の無視として再解釈される。源以降になると、資盛は騎馬人として扱われるので、四、盛の車への暴行(乗合事件)の記述は、報復事件の一エピソードとして解釈される。源のセ49(及恥辱)は、おそらく玉葉の記事を基にしているのであろうが、延はセ49の位置では空白を残しながら、恥辱については報復事件(通貞の説話M)と関連して述べている。即ち、源が乗合事件を再構成した様に、延は乗合事件を基に、報復事件を再構成している。センテンス化、延、長のセ43における文の切り方の動機は、主語反復(セ34、34')であろう。

盛	50	51	×	52	60	{	×	61	51	62b	(16を含む)	129	{	...
四	61a	61b	50'	51	52	60'	61'	62	(16'を含む)				64	
源	50	51	51'	52	60	61	62	(16"を含む)				63	64	
延	50	50'	51	51'	52	60	61	62	(16"を含む)			63	64	
長	50	51	51'	52	60	61	62	(16"を含む)				63	64	
南	92'	×	{	77~81	×	×	×	×	×	51	60	60'	...	63 64
屋	50	51	51'	60	×	×	×	61	62			63	64	
寛	50	51	52	60	61	62						63	64	65

盛	52	68 69	'70'	70"	71~72/N	75
四	66	68 69~70			75a 74 75b	
源	66 67 68 69	70		71	73 74 75	
延	66 67 68 69	'70'	70'	71	73 74 75	
長	66 67 68 69	'70'	70'	71	73 74 75	
南	66	69~70			75' /K 75	
屋	66	68 69 70	71		73 74 75	
寛	66 67 68 69 70		71	~72/N	73 74 75	
盛	...					

'16加様の事よりこそ天下の大事も出来り '16'、'16'「…従加様事大事出来／成世乱」 50宿所へかへりて 50'越前守爲友誠（「此事穴覧こ披露すな」と警められけれども） 51有りのままに申す 51'入道最愛孫之間 52猶腹をすえかねて '61'又小松内大臣聞受 61/51いそぎ入道の許へ参じされけるは 63候披諫申者 '63'誠家人 66入道腹居兼 68田舎者の氣折に 69こはごはしけるが 69-70物不覚言 70欲無 '70'重き事無しと思て 71不允前後者 '70'上臈も下臈もわきまえず 70"前後を不知ける 71-72/N難波妹尾に下知し給けるは（N：難波説話の一部） 75'K（影綱・家貞説話）

解説

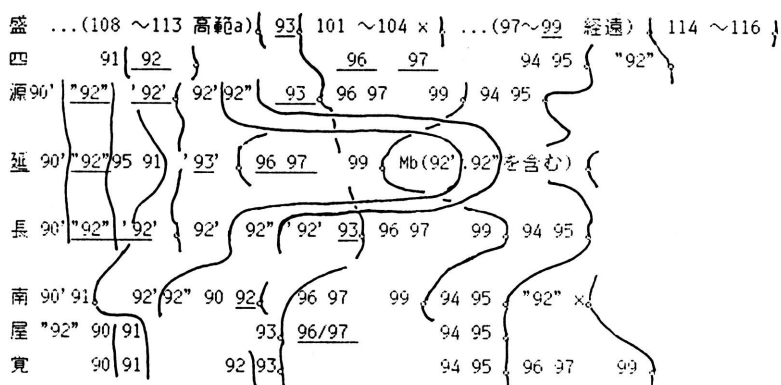
文章化 表3下欄で示したように、四では乗合事件に対して、重盛の方が清盛よりも先に対応している。重盛が乗合事件・報復事件の主要人物であったという史実（玉葉、愚観抄、百練抄、盛引用の「秘本」）を踏まえた上で、四は部分的に古態性を保っている。

盛	75' /N	76	79 80	82:	{	83	84	85	85'	}(86~88)	}
四	77~78		79~82	83		85	85'				
源	75' =N		79~82	83		"85"	85'		76 80		76 82
延	75' /M	80'	83a 85a 85a'		76	77 ~78	79 80	81 76	82	83b 84	85b 85' b
長	80'		83a 85a 85' a		76	77 ~78	79 80	81 76	82	83b 84	85b 85' b
南	80' 77~78	82'	83" "85"		76			80	81	82	86
屋	75' /K	"85"82'	83' 85' a		76	77 78 79	80 (81	82		83' 85b 85' b	86 87 ~88 89
寛					76	77 78 79 80	81 82			83 84 85 85' 86 87	88 89

76無何心 82成御出 82a大炊御門を西へ御出なる 83'中御門猪熊堀川の邊に
 於へて 83大炊御門猪熊限 83"兵共中御門堀川にて 83a中御門猪熊邊にて
 83b猪熊堀河の邊にて 85武士太多 '85'六十餘騎軍兵 "85"武士現甲三十
 騎バカリ 85a六十餘騎の軍兵を率して 85b六十餘騎の軍兵 85b六十余人都
 合基勢三百余騎 85'兵具したる者三十騎ばかり走出て 85'a殿下の御出待懸
 たり (など) 85'b…待進せて (など)

解説

文章化 盛、延、長類では、小事件Ac2 (表2a、表3 参照) の内容が反復し
 ている。基房に焦点を絞っている構想Ac1→Ac2 (四類) と、資盛に焦点を
 移した構想Ac2.1 (セ82a、83a、85a、85'a) →Ac1 (セ84) →Ac2.2 (セ83b、
 85b、85b、85'b) が成立した。即ち叙述は、「侍は待っている」→「関白は何
 も知らず内裏に向う」→「侍は待ち受けている」、という風に展開していく。
 中でも特に延類にこのような反復が多く見られる^{注31}。南、覚類では、無駄な
 反復を避けている。



90'不射殺切殺 91引落引落 92有散々事 '92'懸散打落拙散 "92"散々に懸
 散して '92'…打落はり落 '92'前駈御隨身どもれうりやくして "92"在御友
 者共逃散四方 92'馬に仕て逃たるも有り 92"馬を捨て隠たるも有り 93前駈
 六人 (次第に) もとどりを切てけり '93'十九人まで本鳥を切る 97高範、多

解説

感...

盛 (96~97, 108~113 高麗b) 111''' 113 116b 120 121 121'''

108 109 110'

南	107	107'	108	109	110	112	112	112'	113	114	115	116	117 ~ 121	122"
屋	107	107'	108	109	110	111	112		113					(平秘122)
寬	107		108	109	110	111	112		113	114'	115	116	117 ~ 121	122

盛E | 117 x | F | 123 | 123 | 107 | A...C...D ...

四 112\113\ E...A...C...122\ '123'

源 114, x 112 113, 115 116, 120 121, 122 E, 114'

延112 112' 113. E 115 116 120 "121" 122 D...B...C

長 112 112' 113 115 116 120 "121" 122 D...B...C

南 \times \times \times | 123 | 124 \sim 5a | 126b | 124 \sim 5b | 126a | 127 | 128 | 129 | 130 | 131 |

屋 123 126a 124 ~5 126b . 127 '128' 129 E

123 124 125 126(a-b) 127 128 129 E

92'前駈御隨身逃失何 92"無一人 92"供奉殿上人如散蜘蛛走矢 101'殿下自御車崩下給 101"立入惟民家給 104六十余軍兵加様為散 高a、b (高範説話)
 経 (経遠説話) 102或は物見うちやぶられ 103剃剪放御牛車鞆 103或は鞆むながひ切放れて 106'此曲一ター申タリケレハ 107'基後奉知殿下御事人無一人程 108殿下御車副一人逃残 109古老者 110申淀住人因番齊 (先) 使者 111'抑我君成何坐奉尋此彼 111'殿下立隠恠民家御坐 111'''君渡焉給思 111'''取調御車装束寄 112ワナナクワナナク參テ 112'只一人しりがひむながひ給ひ合せて 112"御牛求出テ 114御直衣もしほしほとして渡せ給けり 114'淺猿事共也 115還御儀式心憂只可推量 “121”ためしありがたくこそありけめ “121”すくなくこそありけめ 121直事にあらず 121'''子細あらんや 122此聞平家悪行始 122"是ソ平家悪行ノ始ナル 123小松内府大驚被歎 ‘123'小松殿大歎無甲斐 126a「凡重盛子供者…」 126b「難入道殿雖被下知何不思議…」 127越前守被諫 128…此大臣… ‘128'此大納言… A (多田源三はかつらを被り参内) B (高則はかつらを被り参内) C (かつらを被った者は出家) D (西八条にこしらえものあり) E (御定が延びる) F (秘本によれば、入道は何も知らない。重盛の責任である) 注31

解説

文章化 盛、源、延、長では四の構成が改められて、セ123 (重盛による報復事件批判) がセ107 (清盛による報復事件歓迎) の直後に置かれている (表2a、2b、表3)。ところがこの結果、セ123 はセ122 (平家悪行の始) に先行するようになり、重盛の姿勢をも悪業として解釈し得る点が不備になった (表2b)。南以降の本では、この点を改め、四の構成をほぼ回復している。

センテンス化 セ107～123、セ108～114、セ122、セ123～126、セ127～129等の各配列は、平家物語の成立過程に、移動、あるいは新しく挿入してきた。このような配列の切れ目における結合性は低く、文が切りやすい。

諸本間の重なりはあるものの、セグメント、最短文の配列間の類似を基準に、調査された諸本はほぼ次の序列で並べることができる。

四部本類と盛衰記類（注9参照）→源平闘争録類→（延慶本Ⅰ →）延慶本Ⅱ類と長門本類→南都本類と屋代本類…→覚一本類

南は混合類の本であるが、その成立は延Ⅱ、長の成立に後続することが最短文配列対照表から読み取れる。

また「小事件」配列の対照表（表3）からもここに述べた成立順が窺い知れる。

図2では、二つの異本類だけに共通のテキスト言語学的な特徴を纏め、このような特徴を共有する異本類を連結線で結んでみた。また「延慶本」のように明白に重層性を示す異本類の文章が、個々の層が単独に所在する「四部合戦状」・「源平闘争録」両異本類のような文章より新態であると見て、推定の成立順に応じて矢印を付けた。図2の中の「四1」は現存の「四部本」の想定祖本の復元の試みを指す。この「四1」が、「延」、「源」、「盛」とより直接の関係を持つ「四2」に比して、略本的な性格を持っていたと考える。例えば、「盛」、「延」の中の「（・・・）車より（・・・）下りざるこそ尾籠なれ」のような「四2」類の表現に対し、「四1」は、現存の四部本と同じく、「不下尾籠」となっていたようである。ところが、「四2」類がこの「四1」より必ずしも古いとは断定しがたい為、「四1」から「四2」への連結線に、方向性を示す矢印を付けないことにした。

又、図3の例の中で示したように、平家物語の文章の生成過程において様々な段階を区別することができ、これらの段階を現存の異本類が部分的に残している。図3では、セグメント整列を対照し、それぞれの段階の生成で行われた「変換」を例示してみた。

図2. 「殿下乗合」を基にした諸本の相関

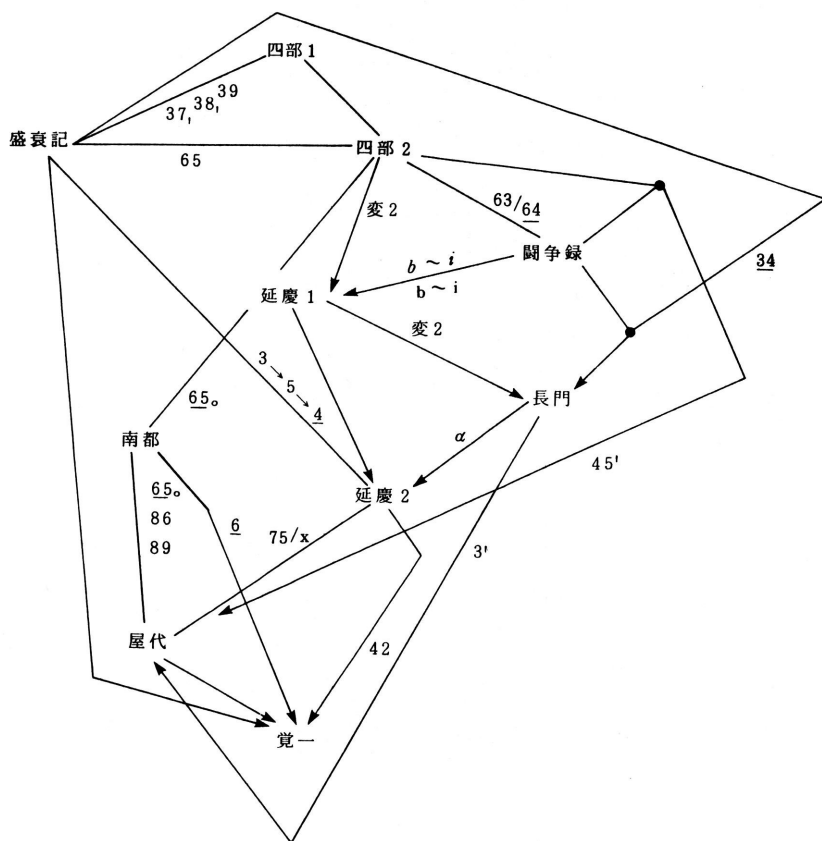


図3. 平家物語生成過程の一例

- 1) 44b 45b 45' 34 35
- 2) (44b) 34' 45b 45' 43 35 34"
- 3) 44a 45a (45') 34 35 43 44b 34' 45b (45')
- 4.1) 35 42 43 44b 34 45b 45'
- 4.2) 34' 36 42(') 43 (44b 34) 45b

各段階の部分的保存：

1 = 四 2 = 源 3 = 長 4.1 = 屋 4.2 = (盛、) 延2、南、覚

2の生成：34'の左動、34'の繰り返し、43を挿入

3の生成過程：4 3の左動、1と2の合流

4・1の生成過程：3の中の重複の整理、42の挿入

4・2の生成過程：3の中の44、45の重複の整理、42の挿入、45'の削除

1・暗程—不知大政入道孫—只人無礼思—御友者共—何白者云

2・然間—前驅御隨身等—不知清盛入道孫—思只打任人 狼藉・・・御隨身

3・夜にてありければ—殿下の御出とも知らず—これによりて（依之）前驅の御隨身—しきりにこれをいらつ—「何者ぞ。御出なるに・・・」暗きほどにてありければ（にてはあり）—御共の人々つやつや入道の孫とも知らず・・・

4・1 「何者ぞ。・・・」—・・・くらさはくらし、御供の人々—つやつや・・・

4・2 前驅御隨身—しきりにこれをいらつ—「洛中にて馬にのるもの・・・」—くらさはくらし—御供の人々もつやつや・・・

五、まとめ

拙論では、「最短文」という概念を設定するが、それは所与文章の意義的内容を不変にした場合、一独立文に置き変えうる 節 (clause) あるいは節の連鎖として定義される。一定の文章をその異態 (パラフレーズ・バリエーション) と対照する時、最短文レベルで検証する方が、文あるいは節レベルで検証するよりも容易である。筆者は、資料提供者九十六名を対象にした文章受容の実験 (共時的パラフレーズ調査) を基にして、最短文分解の基準を設定し、更に平家物語章段「殿下乗合」の、古態と見られる諸本を資料に、平家物語章段「殿下乗合」を構成する最短文の配列を抽出した (通時的パラフレーズ調査)。従来、諸本の成立順について、諸説が展開されてきたが、著者による調査分析の結果、次のような序列が得られた。

四部本類と盛衰記類 (その文章の一層のみ) → 源平闘争録類 → … 現延慶本類と長門本類 → 南都本類と屋代本類 … → 覚一本類。

展望として、現存の諸本の分類よりも、これらの諸本が部分的に残している文章生成の各段階をテキスト言語学法によって目ざすべきであろう。

次に最短文より上位の単位として、時間的配列をなさない「小事件」と時間的配列をなす「小事件群」とを提起し、旧本間の「小事件群」配列の対照を行った。この結果からも先に述べた「殿下乗合」の文章異態類の成立順が裏づけられると考える。

おわりに、恩師であり、本稿にも直接御指導、御助言を賜った渡辺実先生に深く感謝の意を表したい。また調査に御協力下さった川端善明、紙屋栄治、医王滋子諸先生、貴重な情報、御卓見を賜った山下宏明、南不二男、寺村秀夫、村井康彦、杉本秀太郎、西田直敏諸先生、本城二郎氏、資料提供者、更にこの研究を御支援下さった国際日本文化研究センター、国際交流基金、そして京都大学に感謝したい。

注

- 注1 Chafe, W. L. (1980): The deployment of consciousness. In: Chafe, W. L. (ed.): "The Pear Stories" Ablex, Norwood, N. Jersey
- 注2 渡辺 実 (1971) 「国語構文論」、塙書房 (15～16首) によると、文は「形式的独立体、意義的完結体、職能的統一体」である。
- 注3 筆者は、(1974) On hypersyntactical analysis of Japanese Texts, an "interim report", Charles University, Fac. of Philosophy, Prague、の中では文章を「再小陳述体」の配列、(1979) Text Cohesion and Text Linerarity in Japanese, CSc. 学位論文, Charles University, Prague (in Czech) と (1983) Linear Aspects of Discourse structure. Papiere zur Textlinguistik B. 45, H. Buske, Hamburg の中では発話の配列として分析した。なお、1981年完成の日本語論文「文の連接—モデルの試論」(応用言語学、講座、明治書院で発表予定) の中で「最短文」という概念を提起し、(1982) Sentence Delimitation and Sentence Order in Japanese, Proc. of XIIIth Int. Congress of Linguists, 1008～1012, ICL, The Hague-TokyoではMinimal Text Sentence として英訳した。一方、A. Bekes も学位論文 (1985) 「テキストとシンタクス—日本語におけるコヒージョンの実験的研究」(1986年にくろしお出版から発行) で同じ概念を使っているが、彼はパラフレーズ調査の結果が「確立論的な意味以外には予測できない」(1986年版、146首) と見ている。しかし、筆者は1985年に日本滞在中に得た読者認識の実験的調査の結果を基に、最短文分解の主体を越えた、客観的な分解基準を提起している。
- 注4 英語学の概念 (irrestrictive subordinate clause)
- 注5 日本古典文学大系32、33、岩波書店と日本古典文学全集29、30、小学館
- 注6 期道文庫編校大安
- 注7 (1963) 未刊国文資料、昭和38年
- 注8 応永書写、改造者、白帝社
- 注9 国民文庫刊行会 (盛衰記が南北朝完成といわれる雑多な作品である為、拙論の観察は他の旧本と対応する刻当箇所、つまり作品のある特定の層の究明に限定される)
- 注10 (1964) 国書刊行会代表社市島兼吉を (1985) 赤間神宮社務所刊と照らし合せて使用
- 注11 札幌大学教養部女子短期大学部紀要1978.30 第12号
- 注12 桜楓社刊
- 注13 清文堂出版
- 注14 八木書店
- 注15 国民文庫刊行会
- 注16 提題節は、挿入節とは異なり、文章の中で極めて移動しにくい。
- 注17 (1971) The Tale of the Heike, transl. by Hiroshi Kitagawa, Bruce Tsuchida. Tokyo Uh. Press
- 注18 西田 直敏: (1978) 平家物語の文体論的研究、明治書院参考
- 注19 例えば文段1～5では主要最短文は「一院万機の政をきこしめされき」4、文段6～11では「法皇、「…清盛がかく心のままにふるまうこそしかるべからね…」13である。最短文間には、明確な依存関係の外、平行、偏向関係も認められる。ただし、拙論では要約調査の為の「最短

文」の意義を指摘したいのみで、要約自体についてはこれ以上追求しない。

- 注20 前段階で分解して得られた「小事件」の内、後置の文章が前置の文章よりも時間的に先行するならば、その前置の文章の直後で「小事件」、「小事件郡」を共に切る。

例：最短文「（資盛は）殿下にはなづきにまいりあふ。33」が「小事件郡」2.、「小事件」Ab1に時間的に後続している為（表2a）、最短文33の直前で「小事件郡」2.、「小事件」Ab2を共に切る。すなわち、「小事件郡」2.、「小事件」Ab1とAb2は平行し、「小事件郡」3.、「小事件」Ab3は「小事件」Ab1、Ab2に時間的に後続するというような、妥当な分析が得られる。

- 注21 山田 孝雄：（1968）平家物語考. 勉誠社

- 注22 渥美 かをる：（1982）平家物語の基礎的研究. 三省堂

- 注23 山下 宏明：（1984）平家物語の生成. 明治書院

- 注24 （1982）高橋貞一 校注 平家物語. 講談社文庫、昭和67

- 注25 （1981）水原 一：平家物語の形成

- 注26 赤松 俊秀：（1980）平家物語の研究、法蔵館

- 注27 佐々木 八郎：平家物語の達成：語り物の文芸として、国語と国文学、1970.1

- 注28 延Ⅰは、所謂「旧延慶本」（水原 一氏によると「旧長門本」である。拙論では付記のない「延」印を以て現存の延慶本、即ち延Ⅱを示す。

- 注29 この解説は、調査の結果として得た文章異態の成立順を前提としている。

- 注30 渥美 かをる氏（注23）によると、この鷹狩説話は山塊記を基にしている。

- 注31 四の中の詞章「多田の源三～出家引籠」は盛の刻当箇所到大変似ているが、その他の「殿下乗合」の文章は独自で、盛、延、あるいは南を基にしたと思えない。

付記：拙論と関連した研究について1986年に東方学会の国際会議（東京）、京都大学工学部情報処理研究会と国立国語研究所談話研究会、1987年に第14回国際言語学者会議（ベルリン）の席で口頭発表した。